



A series of Gemstone Notes



SHIGLASS

第一幕・怖さの正体

境界監理庁の訓練棟は、いつ来ても張り詰めた空気に息が浅くなる。コンクリートの匂い、白い照明、整列した足音。訓練の参加者達の真剣な表情からは、有事に向けて実戦さながらの熱気を感じる。

【有事】——それはつまりは、異常現象の発生への対処を意味する。

ノイズの観測は古くは平安の書物にまで遡る。かつては妖魔や崇りの類と同一視されたそれは、一度発生すると、世界の境界を歪曲し、物理法則の崩壊や人々の精神への影響を与える。境界監理庁はそんなノイズに備えるため、一部の人々に発現する「異能」をも管理対象として有事に対処しうる実力機関として、今日も粛々と活動を続けている。

柏木椋はそんな訓練区画の端で、グローブの縫い目を親指でなぞっていた。指先が落ち着かない。視線の先では、班員たちがノイズ対処の模擬演習に入っている。空間に走る黒い亀裂——世界の境界、人工ノイズ。そこから溢れるように景色が乱れ、床が波打ち、空気が破裂するような鋭い音が鳴り響く。

「柏木、次、前に出なさい」

訓練教官の声が飛んだ。

もちろん分かっている。自分の番だ。現役隊員の中で自分の異能が一番の出力を持っている。だから前に出るべきだ。理屈は、いつでも正しい。

だが、足が動かない。

椋の異能は《絶対圧縮》

触れた現象を一点に押し固め、結晶として封じる。

衝撃も、熱も、音も、光も、まとめて【固める】ことができる。

『《絶対圧縮》は理論上、ノイズの中心核さえ一瞬で沈黙させられる』

——監理庁の資料には、そう書かれていた。

……書かれているだけだ。

椋の頭の中では、いつも別の映像が再生されている。圧縮が過剰になり、結晶が破裂し、周囲を切り裂く想像。自分が守りたいものを、自分の手で壊してしまう未来。

「柏木！」
かむわき

教官の声が強くなる。同時に、班員が激しく脈打った亀裂に足を取られ、転びかけた。

「——劇症化発生！」

誰かが叫ぶ。床の波打ちが増幅し、模擬とは思えないほどの歪みが生まれ始めた。それに合わせて、まるで闇色の触手のような物体があたりにその腕を伸ばし始めた。

触手に掴まれた街灯がベキベキと音を立ててへし折れていく。

その瞬間、掠の横から小柄な影が飛び出した。

「どけっ！」

力強く叫びながら地面を滑るように駆け抜け前に出たのは、藤森蓮。ふじもりれん 掠と同じ年の、『相棒』だ。小柄なのに動きが速く、力強い。

蓮の異能である『軌道補正』が発動すると、波打つ床の『流れ』が整い、足を取られていた班員達の体勢が戻った。派手さはないが、ノイズによる侵食の影響を最低限に抑え、確実に現場を有利にする力だ。

蓮は振り返りもせず叫んだ。

「掠、いまだ！やれ！」

掠は息を吸った。空気に触れる唇がざらざらと乾いた感触を伝えてくる。足を動かそうとする。けれど心臓が冷たく硬くなった。視界の端で、結晶化した未来がちらつく。

——結局、掠の足は前になかった。

演習は教官の介入で止められ、冷たいサイレンが訓練棟に響いた。

班員の視線が刺さる。責めているというより、戸惑っているように感じる。

皆の視線に宿るのは——『なんで出ない？』という純粹な疑問だった。

演習後、掠は呼び出された。

面談室の机上には、薄いファイルが置かれている。表紙に印字された文字が妙に綺麗だった。

《危険指定…暫定》

教官は淡々と言う。

「君自身がよくわかっているだろうが、君の出力は規格外だ。だが制御が伴っていない。次の現場で結果を出せなければ、隔離訓練へ回す。これは……君自身のためだ」

『君自身のため』それは監理庁がよく使う言葉だ。

安全、保護、管理——その裏側に、異物の排除の響きが混じっていた。

過去、隔離訓練に回された者が『戻ってきた』という話は、ついぞ聞いたことがない。

それはつまり——そういうことなのだろう。

確かに、尋常ならざる異能を持つ存在が、その力を制御できないとなれば、あとは取りうる策など決まっているのだろう。

面談室を出ると、廊下の窓際に蓮がいた。夕焼けが窓から差し込み、蓮の横顔を照らしている。眉間には深い皺が刻まれていた。

……怒っている。

「……危険指定されたか？」

蓮が低い声で聞いてきた。その声には、怒りだけではなく、椋の事を心配していることがありと現れていた。

椋は項垂れる様に頷きかけ、僅かに首を横に振った。

「ううん……でも、このままだと指定しないといけなくなるって……次の現場で結果を見せないと隔離訓練に回すって……」

蓮は舌打ちし、壁を拳で軽く叩いた。その表情はどこか悔しげな表情にも見えた。

「だから言っただろ……どうしてお前、前に出ないんだ？」

「だって……もし、暴発したら！」

椋が言いかけた瞬間、蓮が距離を詰めた。顔が近い。

蓮の瞳には、怒りより焦りに近い感情が浮かんでいる。

「あんな事故があったんだ。お前が暴発を怖がってるのは分かってる。分かってるから、こっ

ちは調整できるように横にいるんだろ？」

蓮は一度気持ちいを落ち着けるように息を吐いてから、椋の瞳をじっと覗き込んだ。ゆっくりと言ひ聞かせる様に言葉を続ける。

「椋。いいか？ お前、今日から『決める訓練』しろ」

「決める訓練？」

「そう。『怖い』って思つた時に、頭の中で言い訳会議を始めるな。立ち止まるな。まず決めろ。『やる』って。あとは俺が軌道を合わせてやる。お前の力は、ひとりて抱える仕様じゃない」

椋は目を伏せた。自分の力が重いのは、力そのものより、それを持つ自分を信じられないからだ。

「……蓮は、なんでそんなに信じられるの？」

蓮は少しだけ黙って考える仕草をすると、ふっと笑って棕の額を指で弾いた。

「お前のことを誰よりも一番よく見てる自覚があるからな。お前の能力のことはよく知ってるし、俺はお前をサポートするって決断してんだ。頼むぜ、相棒」

その言葉が、胸の奥に引っかかった。『決断』——今の棕に一番欠けているものだ。

第二幕…相棒の声が届く距離

翌週、実戦級ノイズが発生した。場所は湾岸のコンテナ街。風が強く、鉄の匂いがする。夜の照明が霧を白く照らし、遠くのクレーンが巨大な影を作っていた。

監理庁かんりちやうの現場指揮車の中で、棕りやうはヘルメットの顎紐を何度も直していた。蓮れんが隣で、呆れたように言う。

「まだそんなことしてんのかよ？」

「落ち着かなくて……」

落ち着かない時、何度も何かをいじってしまうのは昔からの癖だった。こうすると少しだけ落ち着くような気がして、いつも何か困った時は何かを指先で触る癖があった。自分なりの頓服薬とんぷくやくのようなものだ。

「ああ、いい。落ち着かなくていい。お前が落ち着くまで待つてたら、ノイズが広がっちゃう」

蓮はいつも単刀直入にズバズバとした物言いをする。でもだから、何事も悩みがちな椛にとって現場では助かる存在だった。

その厳しい言葉に押し出されるように、一つ息を吐くと、ゆっくりと指揮車を出て現場に歩み出した。

現場に出ると、空間が歪んでいた。ノイズは境界の乱れだ。見えないはずの空間の輪郭が露出し、世界の【裏側】を覗きこんだような感覚がある。ノイズの影響下にある世界では、物理法則があるべき姿を逸脱^{いつたう}していく。視界に映るコンテナの角があらゆる方向に伸び、音が遅れて届く。足元の影が、光に向かって走っていた。

班は二手に分かれ、ノイズの中心核を探し始める。

椛と蓮は同じルートだ。蓮は椛についていくのが当然といった歩みで進んでいく。

しばらく進んだところで、突如空気が

【切れた】

視界が文字通り分断され、真空になった空間に大気が流れ込むように、ゴオツという激しく風が渦巻いた。

コンテナの列がズレ、通路が二本に割れ、一瞬蓮の姿が半分だけ向こう側へ滑った。

「蓮っ！」

椋は慌てて蓮の名前を叫んだ。

——返事はない。

通信機がノイズに噛まれ、ザリザリと砂嵐のような音が走る。

「っ……」

はあ、はあと荒ぶる息を抑えながら、冷静を保とうと歯を聞きしぼり周りを見まわした。

……落ち着け、出血の跡などはない。

今のはノイズによって世界が歪んだことによって見えている幻影だ。

だが、おそらくは蓮との距離は引き離されてしまったようだ。

まだ先ほどのノイズの歪みの影響で気持ち悪くなるように揺れ動く視界の中で、蓮の姿を探して目を細めて周囲の様子を伺う。

——瞬間、視界の端に真つ黒な異物が映こんだ。

それは、仮面を着けた黒いコートの集団だった。

ノイズまみれの世界で足取りが妙に軽く、しかし、仮面の隙間から見える目だけが妙に冷たい集団が。ゆっくりとこちらに向かって歩いてきている。

——だが、ここはノイズの中だ。一般人がいるはずもない。

誰かこの場に立ち入る人間が居るとすれば……

それは監理庁縁ゆかりの者か——

咄嗟とっさに相手の右肩に視線を向ける。

——監理庁の識別章がない。

「グ、リ、フ、だ」

班員の震える声が響いた。

『グリフ (GRYPH)』その名前は、掠も何度も聞いたことがあった。ノイズの核を奪い、加工し、都市の歪みを利用する者たち。

掠達と同じく異能を持ちながら、彼らは乱れを恐れない。歪みを正そうともしない。ただ、乱れを利用し道具にする。

先頭に立つ少年と思しき小柄な人物が、指先で空中をなぞった。すると空間に薄い線が走り、周囲の景色がまた【切り分け】られた。

——それは間違いなく掠達と同じく異能の力だった。

現在確認されている異能の多くは、監理庁で能力の詳細を把握され分類・名付けをされている。掠はその能力を資料で確認したことがあった。

「かつだんぶんり《割断分離》……!」

この能力は《割断分離》と呼ばれている。事象を割断し、別の場所へ移す異能だ。

あらゆるものを割断するその性質から、異能の中でも攻撃力が高い種類に分類されているけれど、おそらくはグリフが核を加工できているのも、この異能によるものだろう。

「危ない、下がれっ！」

班員の一人が鋭く叫んだ。

叫びに反応して、棕の体が反射で後ろへ半歩引く。

——怖い。敵が強い。相棒がいない。

だが、ここで圧縮を使ってしまうば——

嫌な映像が脳内をフラッシュバックし、後ろに身を引く体がこわばり、呼吸が浅くなった。後ろを振り返れば、異能を行使して立ち向かおうとする仲間たちの姿があった。

——ああ、だめだ。だめだ。だめだ。だめだ。力を使えば、また——

「棕、聞こえるか？」

その瞬間、通信機にノイズ混じりの声が割り込んだ。

「……蓮？」

——蓮だ。

その声はひどく遠い。その上途切れ途切れ。

でも、確かに蓮の声。

「蓮！ 大丈夫なの？」

ノイズ混じりの通信機に向かって、椋は叫び返した。

『すまん。孤立した。けど生きてる。そっちはグリフだろ？ 立ち止まるんじゃないぞ』

まるで、椋のことを現在進行形で見ているかのような言葉に、思わず言葉に言い表せない感情が溢れ出た。

「蓮……」

『怖いのは分かっている。分かっているけど、怖いままでも動ける。やるって決めろ。軌道、は俺が合わせる』

『無茶だ』と思う。

場所が離れている。補正は届くのか。

そもそもノイズの中で一人分断されたのだ。蓮は自分の状況も危ないはずだ。

『椋、お前、去年の入学式のこと覚えてるか？』

「こんな時に突然何言ってるの！」

『いいから。あの時、茉莉がノイズに呑まれたのを助けに行っただろ？』

こんな状況とは思えない僅かに笑いを堪えたような、蓮の声音に釣られ、当時のことを思い出した。

確かに去年。高校の入学式の日、住宅街で発生したノイズにクラスメイトが巻き込まれたのを助けに行ったことがあった。ノイズの規模も大規模なものであったし、本来であれば監理庁に報告を入れて、その上で対応するべき事案だったが『現場判断』でノイズ内部に強行突入した。それは別に何か考えがあつてのことではなく、ただ自然に体が動いた結果の出来事だった。

——でも、そうか。あの時は……

「蓮が……蓮がいたから」

あの時の自分は一人ではなかった。蓮が……頼りになる相棒が隣にいたから。

『ははっ、それはどうも……』

蓮は、掠の言葉を聞いておかしそうに、しかしどこか照れくさそうに笑い声をあげる。

『——でも、それなら今も変わんねえよ』

急に打って変わった真面目な声音で、蓮が言葉を続けた。

『いつだって。どんな時だって。お前がどこにいたって。俺はお前の隣にいて。お前の傍そばにいて、お前の道を補正してやるから！』

——だから、安心しろ。

力強く断言する蓮に、じんわりと胸の奥が熱くなるのを感じた。

でも蓮は、いつもそうだ。

自分が危なくても、椋のフォローに回ってくれる。

決断しろと、一歩前に踏み出せと背中を押してくれる。

決断すれば、未来は動くから——と。

椋は息を吸った。

胸の中で言い訳会議が始まりかける。

暴発したら？ 周囲が巻き込まれたら？

隔離訓練？

失敗？

否定？

蓮の言葉がそれを蹴り飛ばす。

「——やっちまえ、まずは決めろ」

椋はグッと唇を噛んだ。

「……やる」

その瞬間、世界が少しだけ静まった気がした。

決して怖さが消えたわけではない。怖さを抱えたまま、ただ一歩前に出ただけだ。

椋がグローブを外し、掌をノイズの裂け目へ向ける。触れた瞬間、現象のざらつきが指先に伝わる。音が、熱が、歪みが、全部同時に存在している。

千々に乱れ、拡散していく力の暴力。

——圧縮すれば、全てはひとつに固まる。

《絶対圧縮》

椋の掌の前で、空気がきししみ、透明な結晶が生まれた。ノイズの乱れが一点に吸い寄せられ、

重力がそこに集中するように収束する。背後にいる班員たちが息を吞声が聞こえる。結晶は美しい。美しすぎて怖い。

様子を伺うようにこちらを見ていた《割断分離》を使うグリフの少年が微笑んだ。

「なるほど監理庁の異能は規格外だね。だけど——」

少年の指先が線を引く。

瞬間、結晶に【割れ目】が走った。

音もなく、亀裂が広がる。

圧縮された現象が解放される兆し。

それは——暴発すれば、周囲を飲み込む。

掠の心臓が凍る。想像していた未来が、現実になる。

「やっぱり……!!」

踏み出しかけていた足がまた止まりかける。
そのとき、通信機が強く鳴った。

「掠！ 見るな、割れ目を！ 中心だけ見ろ！」

蓮の声が、今度は明確だった。どうして？ 距離があるはずなのに。

次の瞬間、掠は気づいた。蓮の補正が、ノイズの【境界】を伝ってこちらへ届いている。軌道補正は物体だけではない。流れそのものを、微調整できる。そして声つまり音は波だから、ノイズの流れに乗せて届かせることができる。

曲芸きょげいの様な力の使い方だが、圧倒的な経験と意志をもつ蓮だからこそできる芸当だ。

「俺が合わせる。お前は押し込め！」

掠の掌が熱くなる。

怖い。でも、蓮がいる。

直接隣にいらなくても、声が届く距離にいる。支えがある。

椋は少年によって刻まれた割れ目を見ない。ただただ蓮の言葉に導かれるように、中心を見た。割れ目は結果でしかない。中心は原因だ。原因を正しく封じれば、結果は止まる。

椋は圧縮を深くする。結晶が硬度を増し、割れ目が押しつぶされゆっくり閉じていく。グリフの少年が描いた線が弾かれ、空間の分割が一瞬歪む。

「……面白い」

少年が小さく言った。

「今だ！ 抑え込むぞ！」

次の一手を打つ前に、残された班員達がグリフの少年に向かって突っ込んだ。

ノイズを圧縮していく椋を尻目にグリフと班員たちによる混戦が始まった。

椋は結晶を保持したまま、中心核の位置を感じ取る。

ノイズの最奥、コンテナの陰。そこに全ての元凶となる脈動があった。

椋は走った。乱戦の中、ただ走り抜けた。

コンテナの山を走り抜けると、急に視界がひらける。

歪み、うねり、混じり合った世界の中で中心核は、黒い球体のように見えた。

実際には形が定まらない。見る角度で揺れ、色が変わる。世界の境界を溶かす心臓だ。ここを封じなければ、ノイズは拡大し続ける。

思ったよりも、中心核が成長している。

封じるには最大出力が必要だった。

最大出力——それは椋が一番避けてきた領域。

圧縮しすぎれば、核だけでなく周囲の現象も連鎖的に巻き込み、都市そのものを【固めて】しまう可能性すらある。

椋の足が止まる。目の前の立ち向かわなければならぬ現実感情が引っ張られる。怖い。失敗したら終わる。自分のせいで街が壊れる。

——背後でリンという金属音がした。

まさか、もうグリフか？

慌てて振り返ると、蓮がノイズの裂け目を抜けてこちらへ来るのが見えた。

髪が乱れ、制服の袖が裂けている。息は荒い。でも目は生きている。

「蓮……どうして……？」

「どうしてもこうしてもない。相棒だろ」

どうして？ どうやって？

掠の浮かぶ疑問を吹き飛ばすように、蓮は軽く笑うと、さも当然のように掠の横に立ち、核へと視線を向けた。眉がわずかに動く。状況を一瞬で理解する顔。

「これは……最大出力、必要だな」

その言葉に、掠は喉が鳴った。

「でもっ、もし……」

『もし』じゃねえよ！』

言いかけた言葉を蓮が遮った。

強い口調。でも、次の言葉は不意に柔らかかった。

「怖いのは分かっている。最初の一步が苦手なものも、知ってる。だから約束しろ。やるって決める。その代わり、俺が軌道を全部合わせるから」

棕は蓮の横顔を見た。蓮も怖いはずだ。補正を誤れば、棕の暴発は止められない。

死ぬかもしれない。街が終わるかもしれない。

それでも蓮はそこに立っていた。どこか余裕でも感じる姿で静かに棕を見返している。

棕はふと、初めて気づいた。自分が怖いのは【力】そのものではない。

自分の決断が、誰かの人生を変えてしまうことが怖いのだ。

責任が怖い。間違える自分が怖い。

だが——責任は避けるほど重くなる。間違いは、止まるほど確率が上がる。動けば、選べる。選べば、調整できる。補正できる。蓮がずっと言ってきたことだ。

棕はゆっくり息を吸い、吐いた。

「……やる」

蓮が頷く。短く、しっかりと確実に。

「よしっ！よく言った！じゃあ、吸い込んで、吐き出せ。頭の中を空っぽにしろ。いくぞっ！」

二人は同時に動いた。棕が核へ掌を向け、蓮がその横で空中に指を滑らせる。蓮の《軌道補正》が空間の流れを整え、圧縮が一点へ収束する【道】を作った。

《絶対圧縮》

世界が沈黙する。

音が遠のき、風が止まったように感じた。ノイズの揺らぎが、椋の掌へ吸い寄せられる。核が抵抗し、黒い波を放つ。触手に触れた周囲のコンテナが軋む。地面が震える。限界に近い。

椋の額に汗が浮かぶ。心臓が暴れる。怖い。怖いまま、ただひたすらに押し込む。

蓮の声が耳元で聞こえた。

「中心だ。中心だけ見てろ。割れ目は見るな。いま、俺が合わせてる」

蓮の指先が、細かく震えている。

補正は繊細だ。強すぎれば壊れる。弱すぎれば散る。

蓮はその境界を、必死に【監理】している。

椋は、決めた。自分の力は何かを壊すためのものじゃない。だからその力を守るために使う。壊すためじゃない。

自分の力を、自分の恐怖のために封印しない。街のために、相棒のために、いまここで選ぶ。核が、透明な結晶へ変わり始めた。

黒が薄まり、虹のような光が走る。圧縮の最終段階。ここで少しでも迷えば、結晶は歪む。掠は最後の息を吐き、押し込んだ。

「――封^{ふう}つ！」

結晶が完成した瞬間、ノイズ全体が一度だけ痙攣^{けいれん}し、そして静まった。裂け目が閉じ、歪んだ音が元に戻り、空気が正しい温度を取り戻す。世界が、元の境界を思い出し、あるべき姿を急速に取り戻していく。

掠の膝が崩れた。急激に解けた緊張に視界が白くなる。

思わず視界が歪み倒れる前に、蓮が肩を掴んだ。

「おっと……」

苦笑を浮かべた蓮が、掠のことを見つめていた。

「——ほら。終わっただろ？」

蓮の優しい言葉に、椋はかろうじて笑おうとした。

だが、笑みはうまく形にならずに、ただ目を瞑つぶった。

「……これは……楽には、ならない気がするな」

蓮が呆れたように言う。

「なるよ。少なくとも『止まったまま』よりはな」

遠くでノイズの消失を確認した監理庁の部隊が到着し、現場の灯りが増えていく。

通信が回復し、指揮官の声が飛ぶ。

封鎖線、回収、報告。いつもの手順。いつもの管理。

だが椋は自分の中で、熱い何かが渦巻いていくのを感じていた。

エピソード…一歩踏みだす

翌日、監理庁かんりちやうの面談室。先週と同じ机、同じファイル。しかし表紙の文字が変わっていた。

《危険指定…解除》

指揮官しりやうは掠りようのことを静かに見つめ、言った。

「君の出力は確かに危険だ。しかし、制御を伴うなら——それは戦力だ。引き続き、現場配属とする」

掠は頷いた。言葉が出ない。出ないけれど、胸の中に確かな重みがある。恐怖ではない。『選んだ』という手応え。

面談室を出ると、廊下の窓際に蓮がいた。

先週と同じ位置。いつもの顔。ただし目の下に薄いクマ——無茶をした証拠。掠は言った。

「ねえ、蓮」

「ん？」

「……多分。次も、怖いと思う」

蓮は一瞬だけ虚を突かれた様な表情を浮かべ目を丸めたが、ふっと笑うと雑な声で返した。

「怖いままでかまわねえよ。決めれば勝ちだ！」

掠は笑った。今度は、ちゃんと笑えた。

「相棒、だね」

蓮が力強く頷く。

「当たり前だ。お前の力はひとりでは抱える仕様じゃないって言っただろ」

窓の外、湾岸の空は薄い灰色だった。

嵐の前でも、雨上がりでもない、ただの朝。

世界は淡々と続いていく。

その淡々とした世界の中で、椋は一つだけ確信した。

覚醒とは、突然強くなることじゃない。

怖いままでも、前へ進むと決めることだ。

そして、その決め方を隣で支えてくれる相棒がいることだ。

椋は蓮と並んで歩き出す。次の現場へ。次の境界へ。

怖さを連れて、それでも。一步。前に。